

山本実彦年譜考：『東京毎日新聞』時代を中心に

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2009-03-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 五味渕, 典嗣 メールアドレス: 所属:
URL	https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/1319

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



山本実彦年譜考

——『東京毎日新聞』時代を中心に——

五味 潤 典 嗣

一 はじめに——問題の所在

近現代日本語メディア史上屈指の事業家、二〇冊以上の著書を持つジャーナリスト、一時は政權入りも噂された中道政
党の党首——。旧改造社長・山本実彦の活躍は多岐にわたる。しかし、彼の経歴には、不明確なところが少なくない。早
くからワンマン経営者として知られ、一般に「山本改造」と称されるほど、彼の個性が社の事業に大きな影を落としてい
たにもかかわらず、である。⁽¹⁾

もちろん、経営者の人格が企業体の動向に直接反映するわけではない。組織としての出版社は、複数の行為者との相対
的な関係に置かれる多面体と見るべきであって、一個の主体のように考えることは実状にそぐわない。だが、『改造』最
後の編集長であり、父子二代にわたって改造社にかかわった小野田政は、「『改造』が進歩的な役割を果してきたのも、
これはすべて、山本家に対する抵抗が作った血と汗の歴史なのだ」という元社員たちの言葉を紹介している。⁽²⁾とするなら
ば、経営者としての山本実彦の経験、思想、人間性、行動様式を、改造社の事業に作用した重要なファクターと考えるこ

とはできるだろう。とりわけ、彼の人間形成・思想形成にかかわる出発期は、いまだ十分な検討を欠いている。山本個人に焦点化した直近の成果として、松原一枝『改造社と山本実彦』（南方新社、二〇〇〇）・小尾俊人『出版と社会』（幻戯書房、二〇〇七）があるが、主な関心はいずれも、改造社創業以後の活動にある。

とはいえ、こうした研究動向に理由なしとしない。第一に、彼自身が自らの青年期にかんして、かなり選択的に語っているという事実がある。ジャーナリストとしての山本の出発は、一九〇六年、二一歳のときの『やまと新聞』入社に遡るが、山本は、ロンドン特派員時代の見聞を除いて、記者時代のことを語らない。彼を『やまと新聞』に紹介したであろう初期の庇護者・大浦兼武とのかかわりに言及することもほとんどない。⁽³⁾

逆に、山本が饒舌に語ることで、かえって見えにくくなっていることもある。周知のように、山本は改造社を立ち上げる直前に、シベリア各地に出没していた。エッセイ「西伯利の旅」〔『小閑集』改造社、一九三四〕によれば、彼はシベリア干渉戦争の最中に、日本軍や反革命軍の関係者と相次いで接触、それなりの役割を果たしていたらしい。また、このシベリア行で得た資金が『改造』創刊に用立てられたこと・背後に久原鋳業（久原房之助の影があることも指摘されている）だが、もしそうだとしても、なぜ山本だったのか・山本と久原の間にどんな関係があり、いったい何を目的にシベリアで活動していたのか、具体的にはまるでわからないのである。⁽⁴⁾ いざ疑問を解こうとしても、資料的な制約が壁となって立ちはだかる。例えば、山本は二十代の一時期、九州の地域紙『門司新聞』に在籍したとされるが、同紙は散佚し、現在、紙面を見ることが不可能である。⁽⁵⁾

こうした状況にあって、慶應義塾三田メディアセンターに寄贈された旧改造社資料から、『やまと新聞』時代の山本実彦の自筆日記が発見された。⁽⁶⁾ 残念ながら、同社在籍期間のすべてをカヴァーするものではないが、小向和誠氏の調査によって、山本の出発期を支えた人的なネットワークの様相が見え始めている。⁽⁷⁾ そこでわたしは、小向氏の調査に学びつつ、山本の履歴の中でも特に検証の遅れている『東京毎日新聞』時代を取り上げようと思う。山本は、弱冠二九歳にしてこの伝

統ある新聞社の社長に就任、わずかな期間ではあったが、メディア企業の経営に携わることになったのだった。この経験が、のちの改造社の経営に影響したことは確実である。そもそも、『改造』創刊に参加したスタッフの中核は、『東京毎日新聞』時代の同僚や関係者だったのである。

本稿では、まず山本社長就任後の『東京毎日新聞』紙面に起こった具体的な変化の様相をたどり、メディア経営者としての彼のスタンスについて考察する。また、『東京毎日新聞』は、山本の社長時代に台湾を舞台にした大がかりな金銭スキャンダルに巻き込まれ、山本実彦本人も逮捕・拘留されている（結果的には無罪）。彼が経験した最初の挫折ともいべきこのスキャンダルの内実や、『東京毎日新聞』本紙とのかかわりについても、現時点で判明している情報を整理しておきたい。

二 『東京毎日新聞』と山本実彦

一九一三年一月二五日の『東京毎日新聞』二面に、次の「稟告」が掲げられた（以下、特に断らない限り、新聞記事の引用はすべて同紙からとする）。

我が東京毎日新聞は、従来三浦勝太郎氏経営し来りしが、不肖今回之れを継承し、一切の経営に任ずることゝなれり、我が東京毎日新聞の世に在るや、其の創業の最も古きを以て、其の報道の機敏なるを以て、其の所論の穩健なるを以て、夙に識者の推称を蒙れり、不肖今や此の名譽ある新聞を綜ぶるの光榮を担う、今より以降大に努力して本紙の面目一新を期す、若し夫れ主義主張に至りては、独立独歩にして、偏せず党せず、時流に超々として、以て新聞の新聞たる本領を發揮するに在るは勿論なり、冀くは大方の読者、倍旧の愛顧を垂れて、不肖の意を為さしめよ。

十二月廿五日

東京毎日新聞社長 山本実彦

一〇〇

『東京毎日新聞』は、一八七〇年に横浜で創刊された『横浜毎日新聞』の後身で、日本語紙としては最古の部類に属する日刊新聞である。自由民権運動期には『東京横浜毎日新聞』の名で政論紙として知られ、一九世紀末から二〇世紀初頭にかけては、社長兼主筆の島田三郎や、横山源之助・木下尚江らの重厚な論説記事が掲載された。足尾銅山鉅毒事件報道や日露非戦論での論陣は著名である。しかし、資本の集中を進め、報道の迅速さや娯楽性の高さを競いはじめた他紙の伸長に押されて発行部数は低迷した。一九〇六年には『東京毎日新聞』（以下、『東毎』と略）と改称、一九〇八年には大隈重信の仲介で『報知新聞』に買収され、系列紙となっていた。⁽⁸⁾

引用した告知が掲載された同じ日付の『読売新聞』は、「従来報知新聞社の経営にかゝる東京毎日新聞社は今回市會議員山本実彦氏が独力にて引受くることとなり同氏と武富時敬三木善八氏との間に一昨日受授を了りたるが編輯營業両部とも社員は全員留任する筈」と報じている。これに先立って山本は、一九一三年四月の東京市會議員選挙に麻布選挙区から立候補、牛込区の坪谷善四郎、小石川区の鳩山一郎らと共に当選している。⁽⁹⁾しかし、一介の新人市會議員に過ぎない山本が、いくら経営が傾いていたとは言え、老舗新聞社を「独力」で買収できたとは考えにくい。この資金の出処については諸説あるが、いづれにせよ、何らかの形で山本を支援する者（たち）が存在したと見るべきだろう。

『改造』創刊メンバーで、『東毎』時代からの側近である横関愛造は、山本は「報知新聞にはいくらかの内金を払って一応社長におさまった」が「未払い社長であったため当分は報知新聞経営当時そのままの形で、中村主筆兼編集長、戸田政治部長などは在職のまま監視役同様で居すわっていた」と述べている。⁽¹⁰⁾この記述は、社員全員の留任を伝えた先の『読売新聞』記事とも矛盾しないが、こうした資金面での問題が、社長としての山本の立場に影響したことは想像に難くない。

後述する台湾での事件の遠因となった疑いもある。

だが、社内基盤の脆弱さにもかかわらず、若き経営者は決して無力だったわけではない。それどころか、少なくとも紙面を追っていく限り、山本は『東毎』改革に辣腕を振るっていたようだ。『報知』系列紙時代の『東毎』は、一時期の『万朝報』を髣髴とさせる、センセーショナルな読み物を中心とする紙面構成を採用していた。元老や閣僚経験者の多額の脱税疑惑を告発したり、帝劇女優たちの性的なスキャンダルを大仰に書き立てる記事が紙面を賑わせていたのだった。『報知』本紙との差別化を狙ったと思しきこの方針は明らかに意図されたものであって、一九一一年版『新聞総覧』（日本電報通信社、一九一一）の『東毎』の項には、『報知』から三木善八が経営に「参画」して以後、「紙面を万朝報式の簡勁直截の体裁に改め、新装の下に生氣を加え」た、という記述がある。

それに対し、山本が経営を握った一九一三年末には、「活目（マユ）すべき本紙の発展」という告知が出ている。「論壇の一異彩を加う」「得難き珍話柄続出」「面白き新小説掲載」、そして「玄洋社物語佳境に入る」。連載企画だった最後のもの以外の三つが新機軸ということになるが、特に注目すべきは、前二者の内容である。

▲論壇の一異彩を加う

政治界、外交界、実業界其他諸方面に亘る評論評伝は我山本社長自ら犀利なる筆鋒を揮って直裁（マヤ）公明其真髓を穿つべし蓋し新春劈頭の評論壇上彗星たるの観あるべし

▲得難き珍話柄続出

猶社会部記事として我現代諸名士が滯欧中に於て極秘せる攀柳折花の痴態失敗談をば赤裸々に拉し来りて読者夜長の好読物たらしむべく又と得難き珍話柄なり

（広告、一九一三・一二・三〇。以下、14・12・30と略記する）

『やまと新聞』時代から山本は人物評論を得意とし、すでにこの時点で『政府部内人物評』（政府研究会、一九〇九）『政界の寧馨児』（博文館、一九一〇）の二著を持っていた。であるから、各界人物の「評論評伝」を目玉に持ってこようとするあたり、当時の彼の興味関心があらわれていると言えるだろう。実際に山本は、「亀城」「亀城生」の署名でたびたび寄稿しているし、一面には、欧米を中心とした過去・現在の政治家の人物評が連載されるようになった。「社会部記事」に「現代諸名士が滞欧中」のエピソードが紹介された形跡は発見できなかったが、スキャンダル・ジャーナリズム風の色合いを残しつつも、政治・経済記事の充実と海外情報重視の方向性は明らかである。

一九一四年一月には「記者招聘」として、「英文を能くする者」^{一、名}「経済界の事情に精通する者」^{二、名}「政治社会記者たる希望を有する者数、名」を公募する旨が掲げられている（広告、'14・1・10。傍点引用者）。この人数配分は、当時の『東毎』の目指す方針と比重を物語っている。同月末には、「東都に於ける経済界に直接勢力を有する銀行会社の営業状態」を論評する記事の一般募集企画を公表、一等当選者には賞金一〇〇円の支払いを約束している（広告、'14・1・27）。一九一四年四月には全ページを九段組みに改定、掲載可能な情報量の増加を図る他、一月に入ると、新聞小説作家として小栗風葉の入社も発表された（「入社辞」'14・11・5）。やや後発の感は否めないものの、山本『東毎』は、日露戦争後の新聞業界のデファクト・スタンダードだった一般紙を目指す路線に向けて、大きく舵を切ろうとしていた。

それだけではない。のちの改造社時代を思わせる派手な宣伝や企画も、この時期の『東毎』の特徴である。一九一四年一月二五日号から「創刊刷新号」という不定期附録を発行、大隈重信・幸田露伴・渋沢栄一・新渡戸稲造・嘉納治五郎・海老名弾正など、延べ二五名にも及ぶ各界名士のインタビュー・談話記事を載せている。第一次世界大戦の勃発後は、どこから転載したかはわからないが、チャーチルやクロポトキンの論説を一面に掲げ（チャーチル「当面の問題・大乱の前途」'14・11・15、クロポトキン「当面の問題・前途の光明」'14・11・18）、日本軍の青島占領後には、上野公園不忍池畔の旧勸業博覧会会場を借りあげ、東京毎日新聞社主催「戦捷記念博覧会」の開催に踏み切った（開会は翌年の一

月二〇日)。どういいうわけか開会式は二月にずれ込んでいるが、ときの大隈首相・岡陸相・八代海相・久保田東京府知事・阪谷東京市長らの祝辞が寄せられ、皇族の来駕も伝えられる一大イベントとなったのだった。

このように見てくると、台湾への関心は、山本「東毎」の積極的な事業展開の一環だったと言えるのではないか。社長就任以後の紙面改革が次々と打ち出されていた頃の『台湾日日新聞』(以下、『台日』と略)に、板垣退助の台湾到着を知らせる記事が掲載されている(14・2・18)。一行には、「寺師東毎副社長、奥野、中西両氏及び横関東毎記者」が加わっていた。このあと板垣は、およそ二週間にわたって台湾島内各地を訪問し、『東毎』本紙に所見「台湾統治意見」を発表(14・3・14)する。視察の具体的な様子は、同行した記者・横関愛造の連載「南国遊記」(14・3・6〜3・15)が詳細に伝えていた。一連の経緯を見れば、『東毎』の企業としての関与は明白である。

ただ、この旅は、たんなる視察や取材が目的ではなかった。そして、この問題に深入りした(あるいは、せざるを得なかった)ことが、上京以後、順風満帆に見えた山本実彦の人生を一気に暗転させることになる。

三 〈台湾同化会事件〉と山本実彦

一九一五年二月二十七日、山本実彦は東京麻布区の自宅で検挙され、三月四日に台北にて収監された。台湾同化会事件に連座したためである。当時の山本は、郷里の鹿児島で衆議院議員選挙出馬に向けた運動を行っていたから、事件は当地でも速報された。『鹿児島新聞』は、二段抜きの速報として「山本実彦氏拘引」「多分台湾同化会に関する事件にして同地方裁判所の囑托マツトに依るものならん」と伝えている(『鹿児島新聞』15・3・1)。

台湾同化会事件とは、一九一四〜一五年にかけて起こった、台湾人の権利獲得を目指した社会運動と、それにまつわる金銭スキャンダルのことを指す。時系列の順に整理すると、事の発端となったのは、先に触れた板垣退助の台湾訪問であ

る。かねてから板垣は、欧米諸国のアジア侵略に対抗するため、中・日両国の友好と連携を主張していた。板垣は、日本による台湾の統治こそ、中・日両国人民の融和の可能性が問われる試金石だと考え、台湾での「同化政策」の徹底を主張したのである。むろん、この場合の「同化」は、台湾人民の日本への「同化」という意味ではないが、板垣は、その枠内で「内地人」「本島人」——当時は、この呼び方で台湾に居住する日本列島出身者と中国系住民とを区別した——の交流を活発化させ、「本島人」の知識と権利の増進を働きかける専門機関の設置を提唱した。それが台湾同化会である。明治維新の元勳で、自由民権運動の伝説的リーダーだった板垣の來台は、島内各地の「内地人」だけでなく、一部の「本島人」からも歓迎された。板垣は一月に再び台湾に渡り、自ら同化会の総裁に就く一方で、多くの台湾人を評議員に迎え、台北・台中・台南の三大都市に支部を置き、全島的な体制を整えようとした。一月二〇日には、五〇〇余名に及ぶ参加者を得て、盛大な発会式が行われた。

ところで、「本島人」に対する「同化」政策を徹底せよ、とする板垣の主張が、なぜ一部の台湾人の支持を得たのか。それは、板垣の議論に、台湾総督府の施政に対する批判的な論点が含まれていたからである。板垣は、『東毎』に寄せた所見の中で、「帝国領台以来二十年を経過したる今日」に至ってもなお「台湾人と内地人の雑婚を認められず教育に於ては専ら職業教育のみを与えられ文明国民の資格に必要な高等教育を与えられ」ていない状況は問題であり、「文明国民」の一員である以上、「人権問題」として台湾人にも「言論の自由」を認めるべきだ、と言っている（『台湾統治意見』）。また、同化会立ち上げの際には、次のような発言も行っていた。

聞かが如くんば台湾総督府に在っても亦全く同化主義を取れりと。同化の実現を図らんには先ず新聞の力に頼りて相互の意見感情を疎通し、而して内地人と本島人との間に共同事業を起さしめて其の利害関係を密接ならしめ、以て相親和するの基礎を造るを要す。故に予は此の理想を達せんがために第一著の手段として新聞を創刊し、又同化会な

る交際機関を興し、自他の畛域を撤して博愛平等の趣旨を実行せんと欲す。此の実行に関しては至誠と親切とを以て本島人を感化するを旨とし、策略手腕の如きは其の要する所にあらず。(板垣退助「台湾同化会首唱に就て」⁽¹⁾)

つまり、板垣の言葉には、あくまで日本統治の枠内ではあるが、「新聞の創刊」等、台湾人の権利伸長に〈使える〉論点が含まれていたのである。事実、同化会運動の盛り上がりは、すでに台湾で一定の地歩を占めていた「内地人」たちを著しく刺激した。台北の民間人グループは、同化会発会式と同日に「反対演説会」を企画した(結局は延期)。発会直後には、総裁板垣に宛てて、同化会の組織上の不備や会計処理の杜撰さを指摘する公開質問状を提出している。これらの動きは、同化会の主張がどんな含意を有していたかを示す傍証となるはずだ。なお、総督府側の資料によれば、板垣渡台のきっかけを作り、物心両面で同化会をバックアップしたのは、台中を本拠とする台湾人名望家・林献堂だったらしい。林は、同化会発会式に合わせ、『台湾日日新報』漢文欄に自説を発表(「同化会述聞録」¹⁴・12・3〜12・8)している。

こうした経緯から、現在の台湾史研究の文脈では、一九一四年からの一連の動向を、抗日武装闘争の武力弾圧以後、台湾での対抗的運動の柱となった台湾議会請願運動の「先駆」「前奏曲」と位置づけている。⁽²⁾一方で、植民地エリートである「内地人」側から見て、台湾島内のメディア政策をめぐって深刻な対立関係にあった総督府と非官僚僚系在台日本人とが「結束」する契機となった、と評価することもできる。⁽³⁾ いずれにしても、台湾で「内地人」の支持を得られなかった同化会の命数は短かった。板垣の離台後、台湾総督府の御用紙『台日』は、日文・漢文両面に「同化会の現状」と題する記事を連載、同化会幹部となった日本人グループの過去の経歴や、不透明な資金の動き、全島から集められた拠金の使い込み等を指弾する大キャンペーンを張った(「同化会の現状」日文欄は¹⁵・1・18〜2・2。漢文欄では1・22〜1・31)。二月初めには司直の手が入り、山本検査と同じ二月二七日付けで、総督府から「公安を害する」として同化会の解散命令が出されたのだった。

それにしても問題は、山本がこの事件に連座した理由である。それは、たんに板垣の視察旅行と『東毎』との縁が深かったからというだけではない。「板垣伯の抱懐する意図の影に匿れて私腹を肥さんとした」(「同化会の現状」) 同化会幹部の一人・寺師平一なる人物が、「東京毎日新聞副社長」という肩書きの持ち主だったのである。⁽¹⁴⁾『台日』によれば、この人物は鹿児島県谷山村(現鹿児島市)の出身で、詐欺罪での前科があったらしい。「大正二年中渡台し殆ど廢墟同然なる東京毎日新聞社長又は同副社長等と記せる怪しき名刺」を持ち歩き、板垣家の「女中頭」と浅からぬ仲だったという記述もある(「同化会の現状」『台日』15・1・26)。「大正二年」一九一三年と言えば、山本が『東毎』社長に就いた年だが、少なくとも『東毎』本紙に寺師の名は見られない。『新聞総覧』にも、『東毎』に副社長がいたという記録はない。

山本側から見た事件の経緯については、『雑誌『改造』の四十年』が紹介した、横関愛造の未発表の文章がある。⁽¹⁵⁾板垣の台湾訪問に同行したという意味で当事者の一人でもあった横関は、この事件には「犯罪を構成するようなことは微塵も無」く、山本は「僅かばかりの聞き込みを好餌として否認なしに選挙運動の真っ最中に」身柄を拘束された、と主張し、次のような観測を記している。

板垣伯の台湾旅行と山本実彦とは深いつながりがあった。もちろん私は裏のカラクリなどは何も知らず、ただ板垣さんに付きそって台湾に行つて来いといわれただけで伯に同行したのだが、私のほかに伯に同行した元国會議員奥野市次郎、鹿児島人の寺師平^{テラシラ}という二人の参謀格と山本さんとの関係を知るにおよんで、これは大変な仕事をたくらんでいるなどということが台湾航路の船中で気付いた。(略)一説によれば、板垣伯の渡台計画は政友会総裁原敬のえがいたくわだてで、林本源に男爵を授け、その謝礼として百万円を寄附させようとする筋書であったが、その計画がうまくはこばないあいだに、大隈内閣の総選挙に破れ、政友会壊滅にひんしたためこの青写真は実現にいたらなかったというのである。

横関が説明する経緯は、大略、台湾総督府側の見解とも齟齬はないが、細部に疑問もある。例えば、最後の「一説」は少々無理があるように思う。政友会が惨敗した一九一五年総選挙は、時の大隈内閣の内務大臣・大浦兼武が、史上に残る露骨な選挙干渉を行ったことで知られ、このとき山本は、非政友会系候補としての立候補を模索していた。『東毎』紙と大隈の歴史的ないきさつを考えても、この時点で山本が、当面のライバルを利するような動きに参画するとは考えにくい。また、横関の文章は、事件の首謀者（とされた人々）と山本との接点について、まったく言及していない。台湾同化会の日本人側幹部には、すでに名前が挙がっている人物以外に、陸軍出身で元大韓帝国政府顧問官の野津鎮武、仏教系のジャーナリスト・宗教学者の中西牛郎、元台湾税関職員の佐藤源平らがいる。しかし、この人物たちの接点は、むしろ台湾島内にあったようだ。『東毎』幹部を名乗る寺師も含めて、少なくとも現時点では、山本実彦本人と同化会幹部とを接続する資料は、一切発見されていない。

であるなら、山本は台湾同化会にどの程度コミットしていたのか。あるいは、板垣と同じく彼も（かつがれた）ことになるのか。この疑問を考える手がかりとなる証言が、以下に示す、鷲巢敦哉『台湾統治回顧談』（台湾警察協会、一九四三）の一節である。

この時、伯爵の随行をして行を共にしたものの横関東京毎日新聞副社長、同記者奥野中西の兩人であり、奥野は前代議士の肩書きを有するもの、中西は文士として一応世間に知れたものですが、落魄の果渡台せるを当時の税関長宮尾舜治氏が本島貿易史を執筆せしむる名目の下に、拾い上げて囑託としたのでありますが、素行不良で間もなく解備せられ、〔略〕寺師某も、似たような連中で、之等の人々は以前も台湾に漢字新聞を許可して貰うと云う口実の下に、板橋の林家から巨資の調弁を企てたこともあり事齟齬して空しく東都にありて流浪中、〇〇〇より〇〇〇の上京を知

り、愈々活動画策の期に至れりとなし、百万之を説きつけてついに板垣伯と会見、その渡台を見るに至ったものであります。〔略〕此の羽織、ゴロ連中の醜行為は、単に之れだけには止りません。今は天下の名士、某氏……勿論名前は申し上げてもよいのですが暫く某氏としておきます……の如きもこの事件前、既に床次鉄道院総裁等を介して台湾北部の名望家林××の授爵運動をしてやるとばかり、寺師、佐藤の徒と策謀、運動費の名目の下に数万円の金を捲き上げていたと風聞されていたもので、……¹⁶⁾

驚巢は、元総督府警察官で、先掲の『領台以後の治安状況（中巻）台湾社会運動史』の「実質的著者であり、当時きつての警察通」（中島利郎¹⁷⁾）とされる人物である。回想記ゆえの誤り（横関は副社長ではないし、奥野・中西は『東毎』記者ではない）も目につくが、引用文中の伏字部分は、順に、同化会関連で林献堂のエージェントとして活動した王学潜と林献堂その人を指し、「今は天下の名士、某氏」は山本実彦のことと見て間違いない。最後の「台湾北部の名望家」とは林熊徴であろう。より直截的な記録もある。赤烏帽子（小川堅三）の『台湾官民奇聞情話』は、「寺師平一のお県人である山本実彦は東京毎日新聞を譲り受け」たが、買収のための「残り半金の調達に苦心して居った」、そのため、「同新聞の支局を台湾に置き漢字新聞を発行するの議も起り之によって同化主義を鼓吹して」台湾人の「利権拡張及其の擁護の実を挙ぐる」という名目の下に、台湾で出資を募る計画があった、と伝えている。¹⁸⁾

これらの記事と、先の横関の回想を重ねると、なぜ同化会事件に『東毎』社長の山本が登場し、なぜ日本人幹部たちが『東毎』副社長の名刺を必要としたかが見えてくるのではないか。板垣の主張に、台湾人に対する言論の解放、という論点があったことを想起しよう。すなわち、①総督府の厳格なメディア規制にもかかわらず、台湾人たちの中で独自の言論機関を所有することへの渴望が高まっており、②そのことを知った一部の「内地人」が、ブローカー的な役割を演じようと画策していた。そして、③そのグループの一人が、『東毎』社長に就いた山本と何等かの縁故があった、という筋書き

が浮かび上がる。同化会幹部の「内地人」たちにとって、凋落したとはいえ由緒ある『東毎』の看板は魅力的だったのだろうし、「漢字新聞」創刊は難しくとも、日本語新聞の支局設置ぐらいは認可を貰えるという見通しがあつたのかもしれない。一方、山本『東毎』にとっても、紙面改革に伴う対外的な拡張路線の一環として、台湾に拠点ができるというのは決して悪い話ではなかった。しかも、山本の台湾への関与が、『東毎』買収の未払い金にかかわるといふ点では、横関と在日日本人側の記述が一致している。なお、『台湾官民奇聞情話』は、「大正二年十月頃東京毎日新聞社長の山本実彦、寺師平一、佐藤源平の一行」が來台していた、とも書いている。もちろん、その時点での山本は『東毎』社長ではない。彼の著書『我観南国』（平田貫一郎、一九一六）収録の紀行文「東京から台湾」をよく読むと、一九一三年の夏に山本が台湾を訪れていたことは確かであろうが、それ以上のことはわからない。¹⁹⁾

同化会を軸とする台湾での新聞事業計画が、どこまで現実的なものだったかは不明である。また、山本が同化会の事業にどの段階から関与したかも立証できない。しかし、民間の在日日本人たちにさえ対抗的な言論媒体の所持を認めなかつた台湾総督府が、台湾人も参加可能な非 \parallel 日本語新聞を許可するとは考えにくい。そもそも、台湾で御用紙と呼ばれた「信用ある中南北の三新聞」と競合するような媒体は「如何なる名義を以てするも亦如何に元老大臣待遇の希望あるとしても」許されるはずはなかつた。²⁰⁾

許正楷『日本統治下の台湾』は、同化会日本人幹部の検挙について、総督府当局は「正面对決を避け、別の口実によって同化会を潰したのである」とする。²¹⁾横関愛造が憤りを込めて述べたように、明確に犯罪を構成するような事案ではなかつたのだろう。「当時鈴木檢察官の論告に山本は将来ある者なるも寺師は言語道断」だ、という区別がされているのを見ても、直接台湾で同化会の活動をしたわけではない山本にかんしては〈見せしめ〉的な検挙だった可能性も小さくない（『台湾官民奇聞情話』）。しかし、一方で、同化会の会計処理がかなり杜撰だったのは事実のようだし、複数の不透明な金銭授受の噂も飛び交っていた。そして、当時の山本には、同化会関係での資金のやりとりを疑われてしまう事情が、まっ

たかないとは言えなかった。

半年間に及ぶ審理の結果、彼の無罪は立証された。しかし、この半年間が、当時の彼にとって、とりかえしのつかない時間だったことは、間違いない。

四 政治という病

同化会事件にかかわる逮捕・拘留によって、山本実彦は、一九一五年総選挙への出馬断念を余儀なくされた。山本に近しい人々は、一連の動きを、同じ選挙区の政友会・床次竹二郎サイドによる選挙妨害と見ていたようだ。

その疑いには、それなりの根拠もある。というのも、政友会系の『鹿児島新聞』は、台湾での捜査着手が『台日』で報じられる以前の一月三一日付で「山本と同化会 上京と三万円事件」なる記事を載せている。『東毎』もすぐに反論を掲げた（『鹿児島新聞の虚報』^{15・2・4}）が、与党系候補としての山本の選挙戦に、相当の逆風が吹いていたことは確かなようだ。

当時の鹿児島は、圧倒的に政友会の影響力が強い土地柄であった。そのため、「挙県一致」のかけ声のもと、山本ら非政友系候補の出馬自体を批判する論調が多く読まれる。『鹿児島新聞』紙面をひもとくと、人格攻撃を含めたネガティブ・キャンペーンが執拗なまでに展開されていた。たとえば、山本の出身地である東水引村の有力者に、山本の立候補取り下げを説得しよう交渉し、「郡の一致に従わざる場合は」「政治上の事は勿論郡経営上の諸般の事に就ても涙を吞んで総べての交渉を除外」する旨が通告されている（『鹿児島新聞』^{15・2・8}）。こうした情勢が、山本と、選挙参謀を務めたという父親をはじめ、家族・親族との紐帯を一段と強めたことは間違いない。選挙を共に戦った同志たちへの信頼も深いものとなったろう。のちに彼は、改造社の経営に多くの親族を迎えていく。『改造』創刊時には、この選挙で山本を支持し

た『鹿児島朝日新聞』の鯉坂南峯（貞盛）が参加している。

山本の『東毎』経営は、実質的には一年半に満たないものだった。⁽²²⁾しかし、このときに彼がやったこと・やろうとしたことは重要である。日本や世界の各方面で著名な人物たちへの強い関心。実際に自紙に彼らの署名を載せてしまう大胆な行動力。欧米の同時代情報に対する鋭敏なアンテナと、そのときどきがまるで〈賭け〉の連続にも見える、冒険家めいた事業展開。小尾俊人は、改造社の社業について「彼は野蛮まるだしのエネルギー、政治への情熱、その反極にある燃立つ事業への理想に全生活をささげ」たが、「金ぐりだけは蟻地獄の苦しみだった」と言っている。⁽²³⁾しかし、たぶん、以前からずっとそうだったのである。ジャーナリスト兼業の経営者としての山本実彦の行動様式は、基本的には一貫していたのではあるまいか。

そして、台湾にかかわる不本意な挫折は、山本の政治への思いをさらに大きなものとした。そこには、この選挙をきっかけに「憂鬱な晩年をくらす」ことになった父や、「私の衆議院議員落選からの気落ち」が寿命を縮めてしまった母に対する、弔いの思いがあったかもしれない（『父母の面影』）。彼からすれば、さまざまな妨害をうけ、存分に選挙戦を戦えなかったという悔しさもあつたろう。しかもこの事件は、山本の政治的立場を決定づけた。それまで非常に近い関係にあった郷里の先輩・床次竹二郎と袂を分かつことになったし、このあと山本は、一貫して反政友会の立場を貫くことになる。

雑誌『改造』創刊を準備したのが、彼の政治に対する情熱だったことも、改めて確認しておきたい。すでに多くの言及がある通り、山本は『東毎』同様、雑誌『改造』を政界進出のための資源と考えていた。もちろんそれは、山本が新聞記者になった頃・ジャーナリズムと政界との流動性が高かった時代の、当時としてもやや古びた考え方ではあった。しかし、雑誌『改造』と改造社は、そんな経営者の自己意識とメディアとしての公共性の間で、終始、揺動し続けることになった。その歴史は、誰もが知っている通りである。

〔付記〕 本稿は科研費（課題番号17520126）「改造社を中心とする20世紀日本のジャーナリズムと知的言説をめぐる総合的研究」の助成を受けたものである。引用文中の表記は、適宜通行のものに改めている。

注

- (1) 水島治男『改造社の時代 戦前編』（図書出版社、一九七六）
- (2) 小野田政『『改造』編集長敗戦記 敗戦記者懺悔録 第二話』（『中央公論』一九五六・一〇）
- (3) 松原一枝も指摘するように、山本が自著で大浦との関係に触れたのは、信心深かった母の思い出として、「私が大浦兼武氏の旨を含んで、大谷光瑞師を京都に訪問したとき」の土産物をめぐるエピソードを紹介した『父母の面影』（私家版、一九四一）の一節だけである。
- (4) 関忠果・小林英三郎・松浦総三・大悟法利雄編『雑誌『改造』の四十年』（光和堂、一九七七）
- (5) 関門海峡の港湾都市で、物流の拠点でもあった門司には、一八九二年五月創刊の有力地域紙『門司新報』があった。が、『門司市史』（門司市、一九三三）に、『門司新聞』の誕生にかかわる記述は見られない。ただし、『門司新報』一九〇七年一月二日付け紙面に、「社告」として、「弊社門司新報ハ従来往々ニシテ門司新聞ト称セラレ」購読者・広告依頼者・郵便物等が「門司新聞」名義で送られることも多かったが、「這般当市港町ニ於テ「門司新聞」ト題スルニ新聞新ニ発刊サレ名称甚ダ紛シク自然同社ト錯誤ヲ来スノ虞」があるので、注意されたい旨が掲げられている。
- (6) 慶應義塾大学三田メディアセンターに寄贈された旧改造社資料については、黒田俊太郎・三浦卓「旧改造社資料の概要と可能性」（『昭和文学研究』二〇〇八・三）が詳しい。
- (7) 小向和誠「山本実彦明治40年日記・翻刻紹介」（科学研究費基盤研究（C）「改造社を中心とする二〇世紀日本のジャーナリズムと知的言説をめぐる総合的研究」第七回研究会での口頭発表、二〇〇七年九月二九日）
- (8) 『東京毎日新聞』の歴史については、山本武利「政治家兼新聞人としての島田三郎——なぜかれはキャンペーンを『毎日新聞』で展開したのか」（『新聞記者の誕生』新曜社、一九九〇）を参照した。
- (9) 『東京市会史』（東京市会事務局、一九三三）。この当時の東京市会議員選挙は三級制で、各区・各級ごとに選挙が行われている。任期は六年で、三年ごとに半数を改選する（一九一四年選挙から、任期四年の全員改選制に変更）。山本は一級市会議員として

- 当選している（櫻井良樹「制限選挙期における東京市会議員総選挙の結果について」『麗澤大学論叢』一九九八・二）。
- (10) 前掲注(4)、『雑誌』『改造』の四十年』。
- (11) 台湾総督府警務局編『台湾総督府警察沿革誌第二編 領台以後の治安状況（中巻）台湾社会運動史』（台湾総督府警務局、一九三九）
- (12) 若林正丈『増補版 台湾抗日運動史研究』（研文出版、二〇〇一）
- (13) 李承機『台湾メディア研究史序説―植民地とメディア―』（未公刊、東京大学大学院総合文化研究科博士論文、二〇〇四・五）
- (14) 前掲注(11)、『台湾総督府警察沿革誌第二編 領台以後の治安状況（中巻）台湾社会運動史』。
- (15) 前掲注(4)、『雑誌』『改造』の四十年』。同書は、台湾での出来事を含む横関の文章を、未発表の「遺稿」として紹介・引用している。
- (16) 鷺巣敦哉『台湾統治回顧談』（台湾警察協会、一九四三）。ただし、ここでは中島利郎・吉原丈司編『鷺巣敦哉著作集 IV』（緑蔭書房、二〇〇〇）の復刻版を参照した。
- (17) 中島利郎『解説』（前掲注16、『鷺巣敦哉著作集 IV』（緑蔭書房、二〇〇〇）所収）。
- (18) 小川堅二『台湾官民奇聞情話』（台南新報社台北印刷所、一九二五）。なお、同書の署名は「赤烏帽子」だが、奥付を見ると、著作者名として「小川堅二」とある。この人物の詳細は不明。
- (19) 「東京から台湾」の文中に、旅行の具体的な日付は書かれていない。しかし、山本は台湾に向かう途次、「威仁親王薨去」の知らせを聞いた、とする。有栖川宮威仁が世を去ったのは、一九一三年の七月である。
- (20) 前掲注(18)、『台湾官民奇聞情話』。
- (21) 許世楷『日本統治下の台湾―抵抗と弾圧―』（東京大学出版会、一九七二）
- (22) 山本自身は、「東京毎日新聞の社長として自分は四年間経営の任にあたった」（『創刊前後の思出』『改造』一九五〇・四）、「（母の危篤が伝えられた―引用者注）当時、私は『東京毎日』の経営を一時、頼母木桂吉君（通信大臣東京市長たりしことあり）に依頼して、自分では川崎正蔵氏の伝記を執筆しておった」（『父母の面影』）と述べる。ただ、一九一六年版『新聞総覧』（日本電報通信社）の『東毎』項では、「大正二年十二月以来山本実彦氏の有に帰し程なく、大正五年一月元旦現社長頼母木桂吉氏其経営を引継ぎ」とある。
- (23) 小尾俊人『出版と社会』（幻戯書房、二〇〇七）